

倫理、政治・経済

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

本年度大学入試センター試験の公民科延受験者数（追・再試験含む。）は、204,223人（昨年度201,528人）であった。そのうち「倫理、政治・経済」（以下「倫政」という。）受験者数は48,729人（昨年度48,701人）で、昨年度比28人の増加と、受験者数の変動はほとんどなく、科目選択率は23.9%であった。「倫政」本試験は、昨年度と同様大問6問で構成され、「倫理」分野、「政治・経済」分野から、それぞれ大問が3題ずつ出題された。設問は、「倫理」分野から19問、「政治・経済」分野から18問で、配点は50点ずつであった。昨年度と比較し、「政治・経済」分野から2問減少した。

「倫理」分野の問題は、リード文が本試験の第1・3・4問からの転用である。設問は、「倫理」本試験の第2問（源流思想）から、「倫政」第2問（日本思想）に2問、第3問（西洋思想）に2問が配された。設問は全て「倫理」本試験からのものである。

「政治・経済」分野は、「政治・経済」本試験の第1問から8問、第3問から5問、第4問から5問がそれぞれ転用され、昨年度あった「倫政」オリジナルなリード文や独自問題はなくなった。

細部にわたる評価に当たっては、次の点に留意して行った。

- (1) 高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）の目標・内容に適合しているか。また、それに準拠した教科書や授業内容に即した問題であるか。
- (2) 基礎的・基本的なものから広い視野に立った思考力・判断力・応用力を問う総合的問題まで、バランス良く配分されているか。
- (3) 「倫理」分野については、リード文は、メッセージ性を持ったもので、「倫理」を学んだ受験者を啓発するものであるか。
- (4) 「政治・経済」分野では、科目の性格を考慮し、身近な社会問題についての関心と考察を促すように工夫されているか。
- (5) 各分野の問題配分は適切か。問題の出題方法、配点、難易度は適切か。
- (6) 過去の問題に対する意見や評価を生かしているか。

2 試験問題の内容・範囲等

第1問 「望ましく公平で連帯感の強い社会とは」について（現代の諸課題、青年期、西洋思想）

今日の課題である格差社会を意識させるリード文で、家庭環境の違いによる成功、公平や不公平、税の在り方や機会均等など、受験者に考えさせるメッセージ性をもつ。また、各設問は、本文のテーマに沿った内容となっており、全体的によく練られた出題となっている。

問1 遺伝子の応用技術をめぐる時事的な内容を取り入れたやや難しい設問。

問2 欲求不満に対する反応についての基本的な問題。平易な設問。

問3 引用資料『税と正義』の読解問題。リード文の理解を深める良問だが、読み取りに時間がかかるやや難しい設問。

問4 若者の意識調査に関する2つのグラフから読み取れることを問う問題である。思考力・判断力を必要とし、読み取るのに時間はかかるが正答は導ける。標準的な難易度の設問。

問5 「コミュニタリアニズム（共同体主義）」は新課程から取り入れられた内容だが、読解力

と概念の正確な理解が求められた。受験者にとってはまだなじみの薄い言葉で難しい設問。

第2問 「喜びの省察とよき生」について（日本思想・源流思想）

先人たちの「喜び」についての省察が、よき生に深く結び付くことを述べたリード文である。将来を見通しにくい現代において喜びの省察を契機とし、自分の生を考えさせようとするメッセージが伝わってくる。その意義は感じられるが、詳細な知識が問われたり、やや読み取りにくい資料文が使われたりして、全体としてはやや難しい大問。

問1 和辻哲郎が説いた日本神話の神々の性格を問う。「祀る神・祀られる神」、柳田国男の祖先崇拜、折口信夫の「まれびと」などはやや詳細な学習を必要とする。やや難しい設問。

問2 仏教における煩惱や苦についての理解を問う難しい設問である。②の「四苦」については用語のみならず本質的理解がないと誤答を招く。正答である④については、「五蘊盛苦」の五つの要素のうち、「色」が物質的要素で、「受・想・行・識」が精神的要素であるとまでは、学習しきれないのではないか。

問3 親鸞が説いた「悪人正機」「称名念仏」「絶対他力」「自然法爾」についての理解があれば、論理的に考えて正答を導き出すことができる標準的な難易度の良問。

問4 読解力を問う。この資料文の内容は正確には読み取りにくい。やや難しい設問。

問5 孔子についての基本的知識を問う平易な設問である。

問6 武者小路実篤、阿部次郎、坂口安吾、小林秀雄について詳細な学習が要求される。また、阿部次郎は教科書の説明がかなり少ないので混乱したであろう。難しい設問。

問7 リード文の趣旨に合致しない記述を選択する設問。「適当でないもの」は新形式だが、時間をかけて丁寧にリード文を読み取れば正解できる。標準的な難易度の設問。

第3問 時間をめぐる西洋近代思想の展開（西洋思想）

近代の西洋における時間観念が近代科学を発展させたのみならず、時間と切り離せない人間の生を捉え直させる役割を果たした。それを指摘することで、時間について改めて考察することの意義を説いたリード文である。源流思想以後現代に至るまで幅広く出題され、全体的には標準的な難易度の大きな大問である。

問1 イエスの教えについての理解を問う平易な設問。

問2 ボッカチオの著作を問う平易な設問だが、アルベルティは受験者になじみがなからう。

問3 カントの倫理思想に関する問題で、読解力と正確な概念理解が必要であるが、正答文が標準的レベルのため、正答を導きやすい標準的な難易度の設問。ただし、誤文を誤文とする根拠を正確に見出すのは難しいと思われる。

問4 イギリス経験論における3名の思想家の概念理解を求める設問だが、バークリーとヒュームについて、ここまでの理解ができていない受験者は少数であろう。やや難しい設問。

問5 ハイデガーとサルトルの概念理解を問う。ハイデガーの説明文は標準的であるが、サルトルの説明文を判断するにはやや細かい知識が必要であろう。やや難易度の高い設問。

問6 プロティノス、ムハンマド、世親、荘子の思想が理解されているかを問う標準的な設問。①は「一者」というキーワードからアリストテレスを消去できるかどうかを問うが、プロティノスそのものはやや細かい知識であろう。

問7 趣旨一致問題で、標準的な難易度の設問である。

第4問 主権国家をテーマにした、政治分野と経済分野の融合問題である。リード文は、伝統的な主権国家の枠組みが揺らぎつつある状況だけでなく、国内での地方分権化の動きにも言及し、受験者に国家の役割についての関心と考察を促す内容で興味深い。設問は基礎的な知識を問う問題を中心に構成されており、難易度は標準である。

- 問1 主権の概念の提唱者を問うやや平易な問題である。
- 問2 地域経済統合に関するやや平易な問題である。人口やGDPで表される市場規模の特徴から解答を導くことを求めているが、加盟国数だけで判断した受験者もいたと思われる。
- 問3 金融政策に関する標準的な問題である。基礎的な知識を活用して、目的に応じた政策例の適否を判断する思考力が求められており、良問である。
- 問4 ギリシャ財政危機の背景に関する標準的な問題である。資料を活用して問題文の空所を完成させる形式の問いで、受験者が解答を導く過程で学びを深めることができる良問である。
- 問5 基本的人権に関するやや平易な問題である。
- 問6 日本国憲法が定める民主的な意思決定の方法に関するやや難しい問題である。表決に関する細かな知識が問われている。
- 問7 日本の地方自治に関する標準的な問題である。
- 問8 日本における1980年代と2000年代の改革に関するやや難しい問題である。正答は基礎的な知識が扱われているが、誤答の選択肢にやや細かな知識や時事的内容が含まれている。
- 第5問 民族紛争をテーマにした、主に政治分野の問題である。リード文は、人権侵害に対する国際社会やマスメディアの役割についても触れており、メッセージ性のある内容となっている。設問は基礎的な知識を問う問題が多く、難易度はやや平易である。
- 問1 少数民族が抱える不満を解消する方法に関する問題である。難易度はやや平易であるが、リード文を読んで正答を求める空所完成形式の出題は好ましい。
- 問2 民族紛争に関する知識を問う標準的な問題である。
- 問3 難民条約に関する知識を問う標準的な問題である。
- 問4 日本の労働問題に関する標準的な問題である。不法就労外国人への法適用の問題については、労働者保護立法の趣旨を正しく理解していれば判断できる。
- 問5 マスメディアと人権に関する空所完成形式のやや平易な問題である。「メディア・スクラム」という報道の在り方に関心を促そうとする出題者の意図は理解できるが、「政治・経済」としての出題の適否については意見の分かれるところである。
- 第6問 市場の働きと財政をテーマにした、主に経済分野の問題である。リード文は、効率的な資源配分を実現するための新たな担い手が求められているという社会の課題を的確に捉えている。設問は、知識や思考力、資料読解力を問う問題で構成されており、難易度は標準である。
- 問1 需要供給曲線のシフトに関するやや平易な問題である。基礎的な理解力を問うのに適した出題であるが、出題形式の工夫を期待したい。
- 問2 社会保障の発展に影響を与えた法律や報告に関する知識を問うやや平易な問題である。
- 問3 公共財の性質に関する問題である。「非競合性」と「非排除性」の性質の違いを正確に理解しておくことが求められており、やや難しい問題である。
- 問4 日本におけるNPO法とNPO法人に関する問題である。細かな知識が問われており、やや難しい問題である。
- 問5 日本の地方財政に関する標準的な問題である。2001年以降の景気動向を踏まえ、基礎的な知識を活用してグラフを読み解く思考力が求められており、良問である。

3 試験問題の分量・程度等について

「倫理」分野については、以下のとおり。出題の類型については、主に総合的な思考力・判断力を問う問題は5問15点から6問16点配当に、主に概念理解を問う設問が7問18点から11問28点

配当に増加、主に用語や人名について問うものが、7問17点から2問6点配当に減少した。単純に知識を問うのではなく、新課程を意識した読解力・思考力・判断力を必要とする設問が大幅に増加するとともに、基礎・基本的とは言えない人名を問う出題もあった。配点は、現代の諸課題14点、源流思想11点、日本思想12点、西洋思想13点である。問題の程度については、第1問、第2問はやや難しく、また第3問は標準的な難易度であった。

「政治・経済」分野については、以下のとおり。問題の分量・程度は、四つの観点で分類し分析した。教科書に基づく知識を問う問題は、昨年度の13問30点から13問36点に増加した。教科書に基づく知識を使って思考力や応用力を問う問題は、昨年度の2問6点から2問（第6問の間1・問3）5点に減少した。時事的な問題は昨年度2問5点出題されていたが、本年度は出題されなかった。資料を用いて分析力を問う問題は、3問（第4問の間2・問4、第6問の間8）9点と昨年度と同様であった。四観点のうち時事的な問題が出題されておらず、四観点のバランスを考えた出題が望まれる。また、基礎と応用との分類では、基礎が15問42点、応用が3問8点となっている。

4 試験問題の表現・形式等について

「倫理」分野の出題形式は、昨年度と比べれば、三つの文の正誤を全て判断しないと正解できない設問が1問減り、4択のものが3問増えた。だが、選択肢等では3行以上の割合が高まった。従って、受験者の負担はかなり重くなった昨年度から横ばいの状態である。なお、設問の表現については、受験者が理解できる範囲内のものであった。

「政治・経済」分野では、リード文では、政治や経済の諸問題に対する意識や関心を喚起するバランスの取れた文章であるが、リード文の内容との関係性が薄い設問も一部に見られた。リード文を活かした設問となるよう留意していただきたい。

5 要 約（総括的な評価）

「倫理」分野については、各リード文はよく練られているが、昨年度と比べてメッセージ性という点では若干後退した印象を受ける。その中で、第1問は高く評価できる内容であった。昨年度指摘したグラフの読み取り問題も改善が図られた。しかし、資料問題や選択肢が難解化、長文化し、全問を解答するのに多くの時間を必要とするであろうことも感じられた。設問については、学習指導要領は網羅的な思想史の学習に陥らないことと、課題探究的な学習の実施を求めている。その学習を積み重ねてきた受験者が力を発揮できるような出題を、選択肢の作り方を含めてお願いしたい。

「政治・経済」分野については、学習指導要領が求めている内容に沿って、広い範囲から出題されている。全体として、教科書での学習を基本とした出題であるが、思考力や判断力を問う問題もバランス良く配分されている。学習指導要領の改訂を受け、基礎的・基本的な知識を問うことに重点を置きつつ、習得した知識を活用する力を問う出題形式の更なる工夫に期待したい。